

# 谷崎潤一郎関連資料 泗川銀爾「青年谷崎の北京見学」紹介

以下に紹介するものは、雑誌「同仁」第8巻第11号（昭和9年11月号）に、泗川銀爾という人が書いた「青年谷崎の北京見学」という一文の全文である。谷崎が大正七年に中国旅行をした際、北京での動静の、ほんの一端が垣間見られるだけではあるが、遺されている資料が極めて乏しい中では、貴重な証言と思う。

谷崎は、『支那の料理』（大正八年）で、この間支那へ行つた時も本場の支那料理を食ふと云ふ事が主な楽しみの一つとなつて居た。『と言ひ、あちこち食べ歩いた事が窺える記述もあるが、具体的な詳細は知り得ない。「青年谷崎の北京見学」には、村田鳥江からの伝聞ではあるが、北京での谷崎の豪勢なグルメ・ツアーの片鱗を窺い知る事が出来る。谷崎が『ちよいの、ノートを見ては珍品を注文する』とあるのは、恐

らく出発前に、笹沼源之助などから情報を仕入れて準備していたのであろう。

今東光『毒舌文壇史』（徳間書店）によれば、谷崎は岡本時代（大正十五年）昭和六年（に、豆腐百珍』（天明二（一七八二）年刊）を手に入れ、千代子に全部作らせてみたと言う。そういう徹底した探求心のある人なのである。

なお、雑誌「同仁」を発行していた同仁会は、日清戦争後、東洋の盟主という意識を持つた人々が、主に中国を医学的に啓蒙することを目的として、明治三十五年六月に結成し、昭和二十年の敗戦まで続いた医学団体である。「同仁」は明治三十九年に創刊された同仁会の機関誌で、本来は医学雑誌であったが、昭和二年に第三次「同仁」を発行する際、日中関係が次第に緊張を増す状況を憂慮し、日本人の中国への理解・

細江光

関心を高めることを意図し、広く中国の人情・風俗・習慣等の紹介に努めるようになり、この様な文学関係の記事も掲載されるようになったようである。

余事ながら、この雑誌に掲載されたものの中には、郭沫若・田漢・郁達夫の作品もあり、また武田泰淳の初期の文章なども含まれているのである。

（なお、雑誌「同仁」については、大里浩秋氏の「同仁会と『同仁』」(神奈川大学人文学研究所・人文学研究所報 40、2007.3.10 <http://human.kanagawa-u.ac.jp/kenkyu/publ/pdf/syoho/no39/3904.pdf>) に拠った)。

## 青年谷崎の北京見学

泗川 銀爾

山田飲江は晩年、北京の順天時報(注1)に暇を告げて、東京へ去った。あとでは、社長の亀井陸良が、後任主筆の撰定に、一

方ならず苦心した。大正三、四、五年頃のことである。究極山田の推薦で、梁川流水(仮名)といふ漢学者を東京から迎へた。新主筆、フ口ツクに白の蝶ネクタイといふ超モダン風の風貌をもつて化石橋へ乗り込んで来たが、どうも彼れに対する編輯の空気が面白くない。萬事がインチキの虚仮威しだといふので、同郷の辻聴花(客員)(注2)を除き編輯局の日本人記者全部が、白眼をもつて彼れに對すべく、暗黙のうちに一致した。果然打倒梁川が爆発した。その第一線にあつたのが、安東不二雄、紀内五郎(客員)、それに筆者。さすがに亀井は果断に出た。片や安東、紀内、<sup>(スズ)</sup>四川、片や梁川、共に速刻退社を命ず。大正五年初夏、林権助公使着任の直後だ。

私は東京での同窓、秩父固太郎の紹介で彼れがいま流学中の、霞公府の同学会の寄宿舎へ入つた。

□ ほう、立派な机ですね□

□ 塩谷温さんが在学中使用されたのを、記念に残してゆかれたのだそうです□

よし、この机で一つ勉強してやらう。と自分では落付いたのであつたが、意外の故障が起つて、在宿二月とたゝぬうちに追立てをくつてしまつた。

そこで今度は、他の友人の世話で、王府井大街の南端、交民巷を一眸の内に収める四層楼、カツタネオ・ビルの屋根裏に巣くうことになつた。

「天津のA洋行が、下に看板を出す必要上借りてゐるのだから、遠慮なくつかつてくれ。」  
といふわけで、部屋料口八。さあ、こうなると人間、至極のんきになるもので、明くれば小鳥を泊木に高く捧げて街から街へ、時には護城河に沿ふて城外をさすらふ。暮るれば屋根裏といふわけ。

こうした生活の二年後、大正七年の夏（注3）のことである。ある日、私は順天の客員、都甲文雄の新居 中街であつたか、松樹胡同であつたかの東端の南側、中国銀行のちよつと南西に当る をおとづれた。応接間は蒸すやうだ。それに盛夏の真昼を、栄養不良のまゝ、てく／＼あるき続けたせいであらう。でなければ、急にぱくついたせいであらう。いや、それらの綜合であらう。俄かに眠気を催した。

「一寝入りするぜ。」  
すつばだかになつて院子（注4）へ飛び出した。日光浴だ。頭に新聞紙を三四枚かぶつて、院子のまんなかに出てゐた手頃の板床の上に、ころがつた。ちやうどその時、門でベルだ。ボーイが名刺を奥へ取次いだ。来客だな、と新聞紙の下から横眼で覗く。未知の青年だ。白の背広（詰襟だつたかな？）に麦稈帽。その帽を右手に日を避け、ばかりに……ばかりに……人造石を敷きつめた院子を、大股に相接へ通つた。眼光炯々、色浅黒いざんざり坊主。一くせありそうな

奴だなと思つたが、所詮は未知の若者だ。私はそのまゝ、眠つてしまつた。

眼覚めて、都甲に

「さつき来た小僧は、だれだい？」

「谷崎潤一郎だ。」

「へいえ、たしに崎？」

都甲は中国政界の動きを、なか／＼よく観る。特に昵懇な蒙古王との接洽（注5）から、その当時北京有数の蒙古通。それに、以前、保定（注6）で中国の学校の教諭をやつてゐたので若い中国人についても、将たナイーブな中国の社会についても、可なり理解がある。私は彼れの中国談を聴取すべく、わざ／＼来訪した谷崎に、陰ながら敬意を表した。

谷崎は東京府立の一中出だが、築地にあつた分教室から日比谷へ転じた（注7）ものと聴いてゐる。市電で銀座四丁目から築地の西本願寺前へ出る間に萬年橋を渡る。あの橋を渡つたところの右角に一中の分教室があつた。今の東劇の手前だ。一、二、三年生を、こゝで分教授する。四年になつて数が減じたところだ。日比谷の本校に合併するといふ機構だつた。それが明治三十五年の新学年を期し、独立して府立三中となり、在学の新二、三、四年生が錦糸堀の新校舎へ移つた。分教室主任滝沢又市（歴史と英語を担当。眼鏡越しに睨む常習がある。今は横浜二中の校長）が教頭。校長には、新たに八田三喜（堀進一の胸像で、

昨秋帝展にデビューしたを迎へて開校し、一年生はそこで募集した。私はその新入生の一人だ。谷崎は年配から見ても、この移転前、即ち日比谷併合最終の学生であつたか、或は新四年生として一時錦糸堀へ移り、五年進級に際して日比谷へ転校したもので、だから、いづれにもせよ、元を糺せば、私に取つては同一系統の中学の先輩だ。と、その当時は考へてゐたのであるが、後年、彼れが改造に載せた芥川龍之介追悼の随筆（注8）のなかで「芥川は自分の中学、高等学校、大学を通じての同窓であつた」と力強く記述してゐるのを見るに及んで、彼れが一時錦糸堀にゐたといふことが、始めて、ほゞ明瞭になつた。なぜなら、芥川は私より三期下の三中出で、築地とはかなり縁遠いわけであるから。つまり私は一年間錦糸堀で谷崎と同学したのであるといふことが想定できる。しかし、これは後年の理解で、この場合には、漠然、同一系統の中学の先輩ぐらゐに考へてゐた。それにしても、そうした先輩を、私の第二の故郷、裡の裡、隅の隅まで知りぬいてゐる北京に迎へながら、東道の任を果す機会を失つたは、如何にも残念だと思つた。

であつた。それがどうした風の吹き廻しか、谷崎に懇請されて、中国菜研究の案内を承つた。連日、前門外（注11）一流の菜館に上つて、山海の珍味にありつく。驚いたことには（烏江に依れば）谷崎が注文してくれといふほどのものは、安いところで、一品、四元、五元の代物だ。

例へば、清湯官燕と、蟹撈魚翅と、異味猪蹄……といった調子だ。それから、ちよい／＼ノートを見ては珍品を注文する。こいつがまた驚くべき曲者だ。たつた一品で十三元とか、十五元とかいふやつを注文するときにや、わしや、胸がつまつたばい。それをたゞの二人でやらうといふのだから、とても食ひきれぬものじやない。しまいに、チエツ、二口か三口で残念ながら箸を置くといふていたらくさ。

これを聴く野満四郎、長谷川愚庵ら、東単牌楼新開路西端の共同通信社編輯室に残留の萬夫不当の豪傑連中、桌を叩いて、うむ。

（本稿は「中国にわが文壇人を迎へて」のその一と見てもよい。次号にその二。その三ぐらゐまで続かうか。一九三四・九・二の八稿）（注12）

## 「注」

(1) 《順天時報》は、北京で1901年から1933年頃にかけて発行されていた日本人が経営する中国語新聞。芥川龍之介の『馬の脚』などにも出る。

(2) 《辻聴花》は、本名・辻武雄(一八六八-一九三一)。中国演劇通として知られ、『支那芝居』上・下(支那風物研究会一九二三-四)や『支那料理の話』(燕塵社一九二五)を刊行している。

(3) 《大正七年の夏》とあるが、谷崎が北京に滞在したのは、十月二十六日頃から十一月三日頃までと推定でき、『夏』は、暖かかった為に生じた記憶の錯誤である。

(4) 《院子》は中国語で、囲いを巡らした屋敷の中庭。

(5) 《接洽》は中国語で、交渉・関係ぐらいの意味。

(6) 《保定》は河北省の市。

(7) 《築地にあつた分教室から日比谷へ転じた》とあるが、谷崎にはこの様な事実はなく、著者の誤解である。

(8) 《芥川龍之介追悼の随筆》は、『改造』昭和二年九月号に掲載された『芥川君と私』のはずだが、谷崎はその中で、『私の出身中学は府立第一中学であるが、芥川君の母校たる第三中学は元来初めは第一中学の分校であつて、(中略)だから君と私とは中学からして同じやうなものである。そしてそれ以来高等学校も大学も同じであ

つた。》と書いている。これが、著者の記憶の中で、変形されてしまったのであろう。

(9) 《村田烏江》は本名・村田孜郎(一九四五)。大正八年五月に玄文社から『支那劇と梅蘭芳』という本を出している。その序文を辻聴花らが書いている位、中国演劇にも詳しくかった。その為、谷崎は、辻(聴花)・村田孜郎・平田泰吉らに中国演劇の説明を聞いたり案内をして貰ったことを、『支那劇を観る記』に書いている。食べ歩き案内を務める事になったのも、そうした経緯からであろう。

なお、佐賀の漢学者・井内南涯(一七八四-一八四六)が村田孜郎の曾祖父に当たり、孜郎が『南涯詩文集』を編纂し、刊行している。村田の言葉が九州弁なのは、孜郎も佐賀で育ったからなのであろう。

(10) 《プロ記者》とあるが、この『プロ』は『プロレタリアート』の略で、貧乏記者の意味であろう。

(11) 《前門外》は、北京の天安門広場の南にある正陽門と箭楼がかつての『前門』で、そこから南に広がる町を指す。市内で最も古い商店街の一つで、清朝から続く老舗も多い。

(12) 泗川銀爾は、この予告通り、『同仁』の次号第8巻第12号(昭和9年12月号)に『龍之介胡琴を愛す』、さらに続けて、『同仁』第9巻第1号(昭和10年1月号)に、『尾崎士郎と上海の怪画』を掲載した。